展望インタビュー

企業史料に関わってき

武田 晴人

聞き手: 本誌 関野 陽一
朝日 崇

My involvement in corporate archives

Haruhito TAKEDA

——今までのご自身の、経済史・経営史研究と企業史料の関わりについてお話しください。

経済史にとって、企業史料が大事になったのは、1960年代から70年代でしょう。我々の世代からです。産業研究が盛んになったことが背景です。それまでには、ひとつ上の世代が、地方史や地主文書を研究対象としていました。当時は、こちらの文書の方が研究関心から見て重要であったわけです。

企業史料には、最初アクセスの方法が分からず、営業報告書や社史を参考にしていました。また、社史を執筆した学者が、史料の面を開けてくれた、という面もありました。さらに、三井文庫の存在が、公開性を高めてくれた、ということもあります。実証水準の基準が、三井文庫によって見えてきた、史料の何たるかがわかったといえます。

自身の経験で言えば、社史の最初の仕事は、古河鉄業の百年史（1976年）でした。大学院時代に史料整理の手伝いから入って、膨大なダンボール箱に分け入りました。そのときのことを今考えると、70年代初めには史料が意外と残っていたということで、無くなるのは、石油ショック以降の減量経営の環境、それで捨てられたのだと思います。その頃は、企業にも企業史料とかいう認識が無かったけれど、たまたま場所があったから残っていた。三十年近く前に整理した石川一郎文書（経団連初代会長）にも、経団連がどうしていいか分からなかった、倉庫を空けたいので相談に乗って欲しい、ということでした。日本工業倉庫でも、屋上にプレハブがあって、営業報告書等400箱、処分に困っていたという話も思い出します。こういう史料が私での勤務している東京経済学部に収蔵されました。

ついでに言うと、英国では、破産した有力企業の史料を、その地域の大学が引き取る慣行があります。90
レコード・マネジメントNo48（2004）

年代にプラットという世界最大の紡績機械メーカーの史料などはその典型的な例でしょう。

―企業史料の定義とは、どのようなものですか。

一言では括れませんが、大きく言って、あるべき企業史料というふうに考えるならば、まず、企業外の史料、すなわち官庁の関係史料と業界団体などの民間史料が挙げられます。つぎに企業内の史料、これは営業報告書や有価証券報告書など公表されているものと会議録、経営計画書などの社内限りの史料とに大別されるでしょう。企業内史料の方が重要なのはいうまでもありません。

歴史的なパースペクティブで眺めると、外部環境の変化と企業史料という観点では、明治以降においては規制産業であったか、大正以降では、産業の組織化が進んだかどうか、さらに、戦時体制での通販化と産業化を経て、第二次大戦後の民主化とディスクラッチャーのもと、数々の法律の制定が企業史料のあり方に大きく影響を及ぼします。

また、内部条件の変化と情報の生産という視点では、単純な組織下での口頭など限られた情報伝達手段から会計書類の整備に代表される報告様式の規格化、そして拡大する事業内容に対応する組織の史料の多様化、現在のIT化時代の史料と続きます。

営業報告書などは、東大経済学部のホームページで、検索できます。企業史料のありだから、企業の歴史をみるなどということも可能になってきました。

―企業史料の保存ということをどう考えておられま

最近話題になりましたが、情報公開法施行に際して、閉鎖機関管理委員会（GHQの指令により、戦時中の統制団体を整理するために作られた機関）の史料がいろんな形で4,000箱でできました。戦前の植民地統治の一翼を担った国策会社などの内部資料です。危うく捨てられるところだったのですが、東大経済学部で一部預かり、最終的に国立公文書館のつくば分館に収められました。処置に困ると、東大が引き取ってくれるらしい、というような噂をどこかに出てくるようです。この4,000箱の整理にかけた費用は、学生のアルバイト程度で、入手という面では大学ではあまり困りません。みんな史料は好きですから、手弁当でもという人が多いのですが、問題は場所です。都心の廃墟になった、小・中学校など利用できないかと考えたりします。残せる場所とプロセスが決まるといい、と思います。大都市での保管場所、史料保管の受け皿がない、という問題の解決策になるのかと期待しています。そういう意味では、地方の大学と、地域の文書館がこれに協力するのはいいのではないかでしょうか。地方の公共団体も、残っているところは残っています。県レベルでは、私の見た限り秋田が一番でしょう。明治初年からの史料が見られます。

近代文書は、残そうという意識が薄いのか、あるいは変化が激しいので先例が参考にならないのか、近代文書に比べて惜けない状態です。情報の生産量が、近代に較べて圧倒的ということもあるかもしれません。昔は紙が貴重で、それで残した面もあるのでしょう。近代は、情報量が一気に増えた分、ゴミも主要文書も一緒にという世界になったもの、残すものをどう選別するかという新たな課題が生まれました。

経済産業省も、戦前のもの、例えば吉野信次氏の文書など大事にして残していますが、戦後はどういう余裕がなくなってしまったようです。

歴史学者も反省すべきことはあります。借りた史料を返さない、いわば行儀が悪いです。現在もある財閥史の仕事をしていますが、創業に関わる人の史料がないので、遺族に聞いてもらうと、二十数年前に学者と称する人が持っていて返さないといえども違うのです。こんなことで、産学協同といったって、絵空事でしょう。

―お聞きしていますと、収集や保存・整理に随分と熱心に取り組んでおられると感じます。どういったことが根底にあるのでしょうか。
武田：企業史料に関わってき

近代史料論、わけても企業史料論がきちんとできて
いない、ということがあるでしょう。自分でやらない
と、残ってきそうもないという危機感です。

近代の史料論では、史料があるまでに残すことを
原則とします。だから、アーカイブの入り口に入る
と、捨ててはいけないと言われる。古い時代は、残っ
していても負荷がないなので、近代は出てくる
量が半端ではありません。何を残すかを考えないとい
けない。その点で、企業史料は方法論が洗練されてい
ません。確かに法律に決まっている、文書管理規定が
ある、ということはあるのでしょうが、これは、選別
の仕組みではなく、何時捨てかかるの設定で、残し仕組
みではありません。どういうものを残すかという基準
を作らなければいけません。

さらに言えば、近代と近代の史料に本質的な違いあ
ると考えます。大雑把な言い方をしますが、近代の史料
は、ジグソーパズルにたとえると、すべてのピース
は残っていない、残っているもので、全体像を掴む、
ということになる。これに対して近代の史料は、面で
残っている、しかもこれから発生する史料についても
考えなければならない。そうしますと、史料全体の構
造を掴まえた上で、どこが重要か、どこを捨てるか、
の判断が迫られます。企業は営利団体ですから、これ
に残すことの利益が産み出され、現物保存かデ
ジタル化といった方法論が加わる、ということにな
ります。これだけコンピュータの検索機能が発達しま
すと、分類することよりも、一つ一つの史料にどう詳
細なインデックスを付けるか、などという議論も出てくるでしょう。

出来るだけ残す、これが一番大事なこと、と思いま
す。企業経営にとっての戦略的な活用を、と考える
と、すぐに思いつくメリットは少ないのです多くは捨て
られる方向にいくのではないか。それでは、
企業史料の芽をつぶすことにもなりません。史料
がどう使われるか、分からないが、残っていることに
意味があると考えるべきです。記録は、特定の使い方
が重要である、といえるでしょう。今は、これが大
事だ、あるいはいうえるでしょう。短期的な
成果を求めると、史料がのみます。

悪いシナリオは、日本がアメリカ型の訴訟社会にな
り、企業に反証の義務が出てくる、だからやむをえず
残す、というもの。これはあまり嬉しい話ではない、
もしご免ないい話ではないでしょうか。そうではなくて、
もっと社会的責任の自覚のなかで、残すという方
向が模索されるべきです。

何十年後にタイムカプセルを開けたら空、というの
では、情けない。戦争の記憶、記録がいつまでも米国
の図書館に依存という話では情けないでしょう。

いまの時代、強くいわれるものは、活用のようです
が、しかし、活用を考えて保存しようとしたら失敗
する、どういう風に使う、と考えると、失敗する。

潜在的には、記録を残していこう、という欲心があ
るのですから、100年後からみたら、今は記憶・記録
の暗黒の時代といわなくても、これを機会に残
すことを主眼とした方法を考えるべきではないでしょ
うか。

史料が残っていないから、といってしまえば許さ
れてきましたが、これからは、史料を残さなかった責
任が問われる時代と思います。

略歴
70年代半ばより、一貫して、日本経済史、経営史を研究。一方、小田原一郎文書をはじめ、日本の経済・産業政策に重要な
関わりを持つ記録類の保存・整理に携わってきました。
http://www.eu-tokyo.ac.jp/~takeda/takedaindex.htm
主要著書：「討合の経済学」1994、集英社。『財閥の時代』1995、新曜社。『日本人の経済観念』1999、岩波書店。『戦後期
の起業家たち』2004、講談社。
社史執筆：経済緑地連合会三十年史、五十年史。小野田セメント百年史、創業100年史・古河鉄業株式会社、花王史100年
中部地方電気事業史、日本開発銀行史